

私の学生時代

リハビリテーション科学部
理学療法学科

講師 佐々木 祐二



今から約20数年前の大学受験の時です。え、理学療法士としてこのように働いているなんて想像もしていなかった。当時の私は、数学だけが得意で理学部の数学科へ入学し将来は数学の教員になるというのが夢であった。浪人までしたのだが北大は厳しい状況、そこで兄の知人から「理学療法はどよう？」って教えてもらった。何としても大学に入らなければというわけで「理学部＝理学療法？」という単純な発想で、何も知らずに当時の札幌医大衛生短大に入学した。そんな状況だったので、解剖学や生理学な



“年上の同級生と石狩浜にて”中央が私。

どまったく訳が分からない。“好きで入った学校じゃないし…”と努力もせず、現実逃避し仮面浪人をしてた。2足のわらじをはくというのは大変であったが、前期試験はOKだろうと結果を見ることなく、夏休みを満喫していた。今考えれば、結果も見ずに遊び呆けるなんて恐ろしいやつだと自分ながらにびっくりしてしまう。しかも、酔った挙句に右手を骨折してしまった(ちなみに、全部クリアしてました)。この右手の骨折で受験勉強をあきらめたのか、授業が大変になってあきらめざるを得なかったのかは覚えていない…。しかし、振り返ってみて自分が理学療法士を目指すきっかけとなったのは恩師である宮本重範先生存在であったことは間違い無い。当時、毎日のようにテレビで流れていた“コンスタンチン君”のリハビリをしていたのが先生であり、“身近にそんなすごい人がいるんだ”って、半ばミハイ気分興味を持ち、

私の学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は佐々木祐二講師と下村敦司教授のお二人に、当時の様子を語っていただきました。



実習の打ち上げにて”中央列左から2人目が恩師宮本先生、3人目が私。

先生の講義の中で徒手の理学療法の素晴らしさを感じ、現在に至っている。

私の同期も、初めから理学療法士を目指していた人、医学部を目指していた人、臨床検査技師から転向してきた人など、18歳から38歳までバラエティーに富んでいた。テストや実習の打ち上げではみんな飲み・語りあかささまざまな刺激ももらったものである。

さて、あらためて学生時代を振り返ってみると… バイトもしていたが、ほとんどが飲み代

に消えていくなどひたすら飲んでいったような気がする。ただ同じ釜の飯を食ったというわけではないが宮本先生をはじめ、同じ努力・苦勞をしたかけがえのない仲間たちと出会うことのできた、とても大きな財産を得た時代である。

私の学生時代

心理科学部
言語聴覚療法学科

教授 下村 敦司



バブル景気と呼ばれる異常な好景気の時代、神戸大学に入学しました。大学はとても自由な校風であり、学生各人が好きなことに集中できたように思います。勉強したい学生は勉強に、そうでない学生は…。私は後者の方でした。勉強もせず何をしてたかという、ダンスです。ダンス一色の大学生活を送りました。それまで、ダンスなんて小学校の体育の授業で少しやったぐらいで、ほとんどやったこともないし、何も知りません。部の新歓行事に参加しているうちに、何となく楽しそうかなという軽い気持ちで入部しまし

た。新歓の時には何も聞かされていなかったのですが、かなり実力のある部であることを入部後に知ります。全国大会で入賞される先輩方、ある部門にいたっては毎年行われる全国大会で優勝を続け、その記録をどこまで続けられるかといったレベルでした。そういった先輩方と良き同級生に囲まれ、徐々にダンスの魅力と部にはまってゆきました。先日朝早く、あいの里キャンパスに出勤すると学生さん達がダンスの練習をしているのを見かけました。「あんなふうに、熱心に練習していたんだよなあ。」さて、全国大会優勝記録ですが、部みんなの頑張りにより、私の卒業まで更新し続けることができました。卒業後は大学院に進学しましたので、こ

こからさらに6年間学生を続けることとなります。大学院からは一転して、勉強に集中しました。博士課程からは神戸を離れ、名古屋大学の萩原正敏先生(現、京都大学大学院教授)の元で学生生活を送りました。先生はとてもユニークなアイデアをお持ちで、研究の楽しさを教えていただきました。ここでの学生時代は、がむしゃらに走ったという記憶しかありません。そして、修了までに数報の研究論文を仕上げることができました。今でも萩原先生とお話する機会があると、この時のことは褒めていただけます。

何事にも全力で真剣に取り組むと、必ず良い形で還ってきます。ただし、それだけではだめ。良い“仲間”と手本となる“師匠”が必要だと、学生時代に学びました。